

11. p-N2, 肺癌切除症例の予後因子の検討

中島崇裕, 木村秀樹, 鈴木 実
安藤総一郎, 飯田智彦
(千葉県がんセンター)

N2 非小細胞肺癌は一般に予後不良であるとされるが, 長期生存例も存在し, 予後因子に関しては, 依然検討の余地がある。今回我々は1992年11月から2003年12月までに, 当科にて肺癌切除術を施行した765例のうちp-N2であった143例を対象に, 術前リンパ節転移(c-N factor)・T因子・腫瘍径・組織型・リンパ節転移形態・術前術後補助療法の有無等について解析を行ったので報告する。

12. 非小細胞肺癌における血管新生抑制因子endostatinと前駆物質collagen XVIIIの発現の意義

常 浩, 飯笹俊彦, 鈴木 実
藤澤武彦 (千大・胸部外科学)
廣島健三, 中谷行雄
(同・基礎病理学)

XVIII型コラーゲンは, 血管新生抑制因子のひとつであるエンドスタチンの前駆物質であり, 血管および上皮基底膜を構成する細胞外マトリックス蛋白の構成成分である。我々は初めて非小細胞肺癌患者にエンドスタチンの血清濃度が高い症例は予後が不良である事を報告した。今回, 肺癌手術例における血清エンドスタチンのレベルと腫瘍組織にXVIII型コラーゲンの発現の関連, また, XVIII型コラーゲン発現の予後因子としての重要性について検討した。

13. 遺伝子発現解析に基づく肺癌リンパ節転移予測の試み

守屋康充, 伊豫田明, 渋谷 潔
飯笹俊彦, 藤澤武彦
(千大・胸部外科学)
二村好憲, 関 直彦
(同・機能ゲノム学)

当科で手術を施行し, 遺伝子発現解析に関して同意を得た原発性肺癌52症例を用いて遺伝子発現解析を行った。肺癌のリンパ節転移に特異的な遺伝子群に関して検討を行った結果, 23遺伝子が抽出された。この抽出された遺伝子群を用いてリンパ節転移の有無に関する予測判別器を作成し, 肺癌リンパ節転移を予測する診断法確立の可能性に関して検討した。

14. 自家活性化NKT細胞による肺癌再発例ならびに進行期肺癌例患者に対する免疫療法—第1相試験

石川亜紀, 本橋新一郎, 飯笹俊彦
藤澤武彦 (千大・胸部外科学)
中山俊憲 (同・免疫発生学)
谷口 克
(理研・免疫アレルギーセンター)

【目的】切除不能進行期肺癌, 切除後再発例に対し自家活性化NKT細胞の投与を行い安全性を検討した。

【方法】レベル1, 2 (1×10^7 , 5×10^7 個/ ml) 各3例に, α -GalCerで活性化した末梢血由来NKT細胞を投与した。有害事象の有無, NKT細胞特異的免疫反応, 抗腫瘍効果の検討を行った。

【結果】Grade 3以上の有害事象は認めなかった。

【結論】自家活性化NKT細胞を用いた免疫療法を安全に施行できた。

15. 消化管穿孔における術後呼吸器合併症の検討

和田啓伸, 土屋俊一, 海保 隆
竹内 修, 里見大介, 岡本 亮
小杉千弘, 丸山拓人, 古田美穂
(君津中央・外科)
柴 光年, 柿澤公孝, 星野英久
佐藤行一郎 (同・呼吸器外科)

消化管穿孔症例における術後呼吸器合併症は稀ではない。我々は消化管穿孔症例の術後呼吸器合併症の危険因子およびその予後を検討した。対象は2001年1月から2003年12月に当院にて手術を行った上部消化管穿孔47例, 下部19例である。術後呼吸器合併症を来した症例は上部よりも下部に多く ($p < 0.005$), 手術関連死亡も下部が多かった ($p < 0.05$)。術前検査値における危険因子を踏まえて報告する。

16. 右肺動脈欠損症の1例

尾辻瑞人, 大多和正樹
(聖路加国際・胸部外科)
松迫正樹, 負門克典
(同・放射線科)

57歳男性。2004年4月人間ドックにて胸部レントゲン上, 右下肺野に結節影を指摘され, 当科紹介となる。既往歴として新生児・乳児期に呼吸器感染の罹患歴はなく, 14歳, 16歳時に登山中に肺炎になり, 緊急入院を要した。入院時, 胸部造影CT, 血管造影検査により, 右肺動脈の欠損と上記結節影が体動脈肺静脈瘤であることが明らかになった。成人発見の右肺動脈欠損症は稀で, 文献学的考察を加え報告する。